50代　　女性　　強迫性障害（F42．1）

[初診時主訴]　手を何回も洗わないと気が済まない　特にぬるぬるした魚が触れられない(洗手強迫）、確認強迫(カギ等)

[現病歴]　32歳の時結婚、長男と長女の二人を儲ける。しかし長男は不登校でひきこもり。長女は統合失調症。

[病前性格] 貴重面、生真面目、小心。

[現病歴]長女が沈みがちになり、不登校に陥る。近くのメンタルクリニックでセルトラリンの処方を受けるが改善せず。12月頃から“知らない人の声が聞こえる”と幻聴が出現し、クエチアピンの処方を受けるが改善せず。娘が当院初診となる。当クエチアピンを中止し、アリピプラゾールで治療した所、幻聴は一カ月ほどで消失した。しかしうつ状態はセルトラリンだけでは十分改善せず、ノリトリプチリンを加えることで解決した。た.しかし春から大学受験のストレスから、母である患者に激しく当たり始めた。

[初診時所見]　X年5月、娘のピアスで開けた耳の傷口が化膿したのを見て、“グチャグチャになって、娘がどうにかなっちゃうんでは？”とパニックに近いと強い恐怖を感じ始めた。X年8月、娘の耳のことが心配で心配で眠れなくなり、初診となった。不安、不眠に加えて、手を洗っても洗っても汚れているように感じ, またカギやコンセントの確認強迫も同時に出現した。

[治療方針と治療経過]　初診後はフルボキサミン(25mg)とフルニトラゼパム(1mg)で治療を始めた。フルニトラゼパムで不眠は改善したが、フルボキサミンは 50mg まで増量したが、洗手強迫と確認強迫には無効であった。10月初めからパロキセチンに変更すると、20mg/日で強迫症状は著明に改善し始めた。投与1ケ月で確認強迫は完全に消失し、洗手強迫もかなり改善し排水溝の掃除や生魚も扱えるようになった。その後も経過は順調で、X＋2年4月には、パロキセチンを中止することができた。

[考察]　何度も繰り返される常同的で不愉快な強迫思考と強迫行為に苦しんでいて、抵抗を試みるが成功していないことから、強迫行為を主症状とする強迫性障害(F42.1)と診断した。また本症例の治療を通して学んだことは、以下の2点である。a）強迫症状の治療に対して、パロキセチンが従来の成書の記述通りに顕著な効果を示した。b）強迫性障害の発症が、統合失調症の娘の長年の看病によるストレスの過重にあるのは明らかだが、一方患者の父親に確認強迫の既往があり、家族的遺伝的要因の可能性も無視できない。（字数：1170 字）